

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 島村 修平

島村修平氏の論文「自分自身の心を知ること：命題的態度の自己知を巡る哲学的ジレンマとその解決の試み」は、自分が自分自身の心に対して、他人に心に対しては決してあり得ないような、特権的な認識的立場に立っているという、自明に見える事態に焦点を当てて、そこに巣くう哲学的問題性を暴き出そうという試みである。島村氏は、一般に命題的態度と呼ばれる様相、すなわち「信念」、「意図」、「欲求」を一つ一つ取り上げながら、解きほぐしていくという形で論を進める。

まず第1章で、自己知の問題を論じるに際しての定式化を提示する。それは、「直接性」、「自己告知性（網羅性）」、「権威性」、「認識論的正当性」、そして「命題的態度の公共性」の五つである。そのことを踏まえて、第2章にて、自己知を論じる際の焦点となるべき特性として、「特権性」と「行為者合理性」が挙げられ、主題化される。そして第三章で、いよいよ自己知にかかわる「信念」についての分析が始まる。その戦略は明晰で、自己知にかかわる「信念」を、「心的傾向性」として捉える立場と、「コミットメント」として捉える立場という、現代の論争文脈でのジレンマに突き合わせ、「コミットメント」として自己知の「信念」を理解していく立場の整合性を縷々提示する、というものである。その議論の基盤には、自己知の「信念」に従った行為をし損ねた場合、当人は自己批判する態勢になければならないという、自己知の規範的ありようへの目線がある。第4章では、自分が「Pを信じているか」ということの確認を「Pと信じるべきか」に変えて確認する、というモランのいう「T手続き」を援用する形で、自己知の「信念」の透明性が論証される。続いて第5章では、「意図」が、「信念」を分析する際の態度と平行な仕方分析される。つまり、「信念」と同じく、「コミットメント」としての「意図」というあり方が析出される。

次に、第6章では、「欲求」が取り上げられる。ここで島村氏は、「信念」や「意図」の分析とは違って、むしろ「欲求」は「コミットメント」として捉えきことはできない、ということ論じる。その主たる根拠として、私たちは実現不可能なことや両立不可能な事柄に対しても「欲求」を持つことができる、という事実が挙げられる。「欲求」の自己知はむしろ心的傾向性という視点から理解されるべきものなのである。かくして、自己知は、「コミットメント」と「心的傾向性」の相補的働きによって達成されることが分かる。そして最後の第7章において島村氏は、本論文の議論、とりわけ「欲求」についての議論が、自己知に関する現代的論争にどのように寄与するかについてまとめる。

以上のような島村氏の議論は、「信念の度合い」、「事実と規範の二分法への疑問」など、さらに検証すべき課題も指摘できなくもないが、自己知に関する今日的論争状況に対して、相当に独自の貢献をなしえる豊かな論述となっており、十分に学術論文としての基準をクリアしている。よって、本論文は博士（文学）の学位に値すると判断する。